

アダム・スミスの価値理論

——「労働の価値」タームの分析を中心に——

揚 武 雄

はじめに

(一) ブローグ教授のスミス解釈について

(二) リカードのスミス解釈について

(三) 『諸国民の富』第一篇、第六章における、いわゆる支配労働「価値」説的展開について

はじめに

「交換価値を規制する原理」と関連をもつ限りにおいて「価値」タームの使用が許される、と考えるならば、普通、スミスの論述において二つの「価値」説——投下労働説と支配労働説——が混在しているとする解釈にも疑問が生じてくる。この点を明確にしているのはいわゆる近代経済学のスミス解釈である。というのも、そこでは支配労働説が交換価値（相対価値）に関係するものではない、と明確に述べられているからである。そこで、本稿ではまず、スミスの支配労働説的論述およびそれにたいする上記論者の解釈を検討し、ついで私見を述べることにしたい。

(一) ブローグ教授のスミス解釈について

考察の対象となるスミスの論述は、『諸国民の富』第一篇、第五章の冒頭から、さしあたり第七パラグラフまでの箇所であり、いわゆる「労働」が不変の価値をもつが故に財の価値を尺度する「標準」とであると述べられているところである。以下少々長くなるが、代表的論客の一人である Blaug 教授の見解を

引用しておく。

「人はかれの有する富または商品を、かれが市場においてそれで買いうる他人の労働の量で評価する。一商品の『実質価格』はその労働価格であるが、その場合労働というのは一定量の人間の時間ではなくて、非効用の単位、すなわち個人にとっての仕事の心理的コストを意味し、価値とは交換価値ではなくて尊重価値 (esteem value) を意味する。

こういうことを念頭におくと第5章の旅は容易である。……現行賃金単位ではかられる商品の価値——それが交換上で支配しうる労働量——は利潤と地代の全価値だけ、その生産に体现された労働の価値を上回る。それにもかかわらず一商品の『真実価値』すなわち努力価格 (effort price) は依然として『骨折と煩勞』——すなわち一商品が現在の賃金率で市場において購入しうるところの『骨折と煩勞』——の単位によってはかられるべきである。』¹⁾

「スミスも指摘しているように、測定されるものの変化を正確に表わすためには標準尺度そのものが不変でなければならない。……スミスは……次のように仮定する。『等量の労働は、あらゆる時と所において、労働者にとって等し

1), 2) Blaug, M., *Economic theory in retrospect* 3d ed, p.52, C.U.P. 1978. 杉原他訳『経済理論の歴史』上, 67~68ページ, 東洋経済新報社, 1975。大胆にも “To my son, David Ricardo” と銘うたれたこの著作におけるスミス・リカードの講評は、ちなみに次のとおりである。「アダム・スミスは経験的労働理論をすら吸収しえなかったが、しかしリカードと同様に、かれは適当な社会会計の単位をさがしもとめ、それをば交換において生産物が支配しうる賃金単位の数に見いだした。スミスとリカードの労働理論に共通な要素は、両者とも『絶対価値の労働理論』とよばれてきたものを、換言すれば、『他のいかなる経済財にも依存することなく、どの経済財に対しても絶対数が付与されるだろうという概念』を提起したことであった。しかし、これは厚生経済学であって、価値論ではない。実質純国民生産物を加算するウェイトとして、われわれが貨幣賃金、人・時間、もしくは相対価値のいずれをもちいるべきかということは、経験的事実もしくは論理的演繹の問題ではなくて、規範的判断の問題なのである。規範的判断は討議されうるが、しかし科学的には証明の能否をいうことができない。」(ibid., p.118, 邦訳, 147ページ)。なお, Blaug 教授の所説を詳細に紹介, 検討した文献として, 中川栄治『「アダム・スミスの価値尺度論」についての海外における諸研究(9)——1960年代(その3; M. ブローグ)——「経済研究論集」(広島経済大学)第6巻第3号, 1983年8月, があるので参照されたい。

い「尊重」価値をもつものといいうる』と。そしてこれで表わせば、等量の労働は『かれの安楽、自由、幸福の同じ部分』を表現する。ひとたびこのことが認められると、一労働者が努力単位当たりずっと多くの賃金財を受け取る場合には、『変化するのはそれらの「尊重」価値なのであって、それらを購う労働の価値ではない』と論ずることができる。非常に多くの注釈者たちを困らせた右のことは文脈上完全に論理的なのである。』²⁾

Blaug 教授のこうした解釈がスミスの真意を再現しえたかどうかはともかくとして、さしあたり「多くの注釈者たちを困らせ」てきた一つの問題にリーズナブルな解答を与えたことはいなめない。それはいわゆる「労働の価値」の不変性についてである。第七パラグラフの論述の途中において、財の価値の可変性に関連して登場する「労働の価値」の不変性の主張は、第七パラグラフ全体のコンテキストにおいては一見奇異な感じをまねがれえないと思われるのであるが³⁾、支配労働説的見地からするとその特異さも消失するかにみえるからである。というのも尺度財として労働単位量——その労働単位が労働量、労働時間そのものではなく、賃金労働者の犠牲にたいする主観的評価を通過した「toil and trouble」、したがってたとえばX時間の労働そのものではなくX'という不効用の大いさだとしても——を選択（デフレーターとしては貨幣賃金率の採用）する限り、それはすべての財の「価値」を労働単位量の倍数として表現することであるからして、定義上、労働（単位）量は「価値」をもちえないからである（一労働単位の「価値」＝一労働単位、あるいは労働の価格＝1）。財の「価値」が支配労働単位量で定義されるということは、とりもなおさず「労働の価値」を支配財貨量（いわゆる「実質賃金率」）でもつて定義するのと同値であり、その際、労働が購入＝支配しうる財貨量がいかほどであろうと

3) ブローグ教授とほぼ同様の解釈をしているホルンダー教授は、しかしながら、なぜか財の価値の可変性に対立するかたちで提起された「労働の価値」の不変性についてはコメントを避けている（Hollander, S., The economics of Adam Smith, pp. 128-129 Uni, of Toronts Press, 1973. 小林昇監訳『アダム・スミスの経済学』, 180～181ページ, 東洋経済新報社, 1976年。なお、同書を紹介した文献として、田中敏弘「スミス研究の新しい傾向——ホルンダー、スキナー、リンドグレンの三研究——」（『週刊東洋経済——「国富論」200年特集——』1976年2月13日号）がある。

も、それは「労働の価値」なのである。

そうしてみると財の価値の可変性にたいして主張された「労働の価値」の不変性、いいかえれば、「労働の価値」が「高価」や「安価」であるのは仮象であって、真実は財の方が「安価」もしくは「高価」であるとするスミスの主張は、一見すると因果関係にある命題のようにみえる。けれども、定義からして、財の支配労働単位量の逆数が実質賃金率の意味での「労働の価値」であるから、両者の交換比率＝相対価値が逆比例的の関係になるのは当然であり、その限りでは先の命題はまさにトートロギッシュなものにすぎない。ところで Blaug 教授が、主観的評価を受けた労働単位量を尺度財となし、それによって評価される財の「価値」（「尊重価値」）は変化しても「労働の価値」は変化しないと解釈される場合、教授は実のところ、財の価値の可変性と関連して「労働の価値」の不変性を説明していない。教授の解釈の根拠をなしているのは、貨幣賃金率をデフレーターとして労働単位量が尺度財の位置にあるということであるけれど、定義上から労働の「価値」が恒等的に一になるということは少しも「労働の価値」の不変性を意味しはしない。定義上からいえるのは、むしろ労働単位量が尺度財であるからして「労働の価値」は定義されえないということであって、そうだとすれば当然のことながらその「価値」の不変性も言及できないのである。尺度財に関する定義から論理的に帰結しうるのは、いま上で述べたことにつきる。そうしてみると、財貨の価値変動に対比するかたちでスミスによって提起された「労働の価値」の不変性について、Blaug 教授は成功しているとはいえなくなる。ワルラスの伝統をもつ新古典派的経済学の立場からすればそうした推理は「必然」かもしれないが、スミン解釈としてはいかなものであろうか。

それでは、先ほどのスミスのトートロギッシュな論述についてどのように判断すればよいのだろうか。出発点はこうであった。すなわち、「等量の労働」が「等しい価値」をもつ、というスミスの主張は、たとえていえば、 A という人にとって労働一単位 X が X' の不効用を表わすとするれば、 B という人にとっても労働単位 $= X$ の不効用は $= X'$ の不効用を表わすということ、したがっ

て、たとえば一日の労働は何人にとっても半日の労働の2倍の「価値」をもつこと、この限りにおいて、重さや長さの単位量が固定されているのと同じく、労働単位量も固定量として種々の労働量に対して公平にその大いさを測定するというものであった。こうした論述をした直後に、先程引用した「労働の価値」の不変性が財の「価値」の可変性に対立するかたちで提起されてきたのであったが、これを解くカギはこの論述における「労働の価値」の定義を想い出すことである。労働単位量を尺度財に採るいわゆる支配労働説的論理においては、「価値」の定義は必然的に物量となる。すなわち、財の「価値」は支配労働単位量でもって定義されることになるのだが、それにとどまらず、尺度財の方もその逆数たる労働単位の支配財貨量（＝実質賃金率）が「通俗的」に「労働の価値」と規定されることになる。この点を通過すれば先程のスミスの命題は、一方が原因で他方は結果であるという因果関係ではないけれど、相互前提関係にある有意味な命題であることがわかる。そのかわり、先程のトートロジーな命題に含まれていた推論は放棄されねばならなくなる。つまり労働の高価、安価は仮象であって真なる事態は財の安価、高価であるという先程の命題は次のように修正されねばならない。まず、労働の支配財貨量が多い時は「労働の価値」は「高価」といえるし、同時にそれは財の「価値」が「安価」であると（逆は逆）。しかしながら、先の命題が命脈を保った代償として、スミスは「労働の価値」の不変性を仮定する以外に逃げ場がなくなったことも、これまた事実である。

もちろん、社会の改良、文明の進歩につれて「労働の価値」は上昇するという楽天的な展望をスミスはもっていたし、社会が富裕に向っているか停滞しているかそれとも衰退しているか、という事態の相違によってその大いさが異ってくることも熟知していた。しかしながら、「世紀から世紀」にかけては銀の価値が、「年々」においては穀物の価格が大きく変動するのに対比して、両者の場合において「労働の価値」は安定している（穀物の平均貨幣価格に貨幣賃金率が比例するとの想定）ことを理由に、労働が「価値の唯一の普遍的な尺度である」ことを論じている限りにおいて、そのように判断しようと思うのである。

とにかく、スミスの論述の中にはワルラス的な意味でのニューメレール、したがって労働の「価格」(=1)なるカテゴリーは存在しない。現実性を重視するスミスの学風からすればそれは当然のことともいえる。スミスにあって存在するのは、「通俗的」な意味での名目価格=貨幣価格と「実質価格」だけである。しかも周知の如く、スミスによる労働の「実質価格」の定義は、労働者が労働を対価として資本家から受け取るところの生活必需品と便宜品の量なのである⁴⁾。この「実質価格」の定義が、スミス自身が下した最初の定義——財の獲得に要する *toil and trouble* によるそれ——とまったく内容を異にしていることは言うまでもない⁵⁾。

- 4) この点については、拙稿「アダム・スミスの『実質価格』について」(大阪経法大『経済学論集』第9巻1号、1985年4月)を参照されたい。

なお、マルサスが次のように述べている点も参照されたい。「アダム・スミスが術語の使用に最も誤りを冒したのは、真実という術語の適用においてである。かれは一商品の真実価値を、それが支配する労働の分量であると、明白に、またくりかえしのべ……。けれどもかれは、このように真実という言葉をこの意味で用いているのに、賃金に対してはこれをまったくちがった意味に適用し、労働の真実賃金とは、労働者がそのうけとった貨幣によって支配することのできる生活の必需品および便益品であるといっている。……労働の価値が、その支配する生活の必需品および便益品の数量の変化とともにたえず変化するならば、それを真実価値の尺度としてもち出すことは完全に矛盾する。……」。(『経済学における諸定義』玉野井芳郎訳、岩波文庫、19頁)。この評注は、スミスの論述における変節(論理矛盾)を剔出している一方労働の「実質価格」の定義について変更を余儀なくされたその原因が、実はマルサス自身が熱烈に支持している尺度財としての労働の採用に帰因していることを見逃している点で興味なしとしない。

- 5) 周知のように、リカードはスミスの論述にたいし以下のような見解を『原理』冒頭で述べている。

「すべての物はその生産に投下された労働の大小に比例して価値が大となり小となることを首尾一貫して主張すべきであったアダム・スミスは、自ら別の価値の標準尺度をたてて、この標準尺度の多量または少量と交換されるに比例して物の価値が大なり小となると論じている。……アダム・スミスは、他の物の価値変動を測定するためには、金や銀のような可変の媒介物が不適当なことをもっとも巧みに説明した後に、穀物または労働を措定することによって、自ら金や銀に劣らず可変の媒介物を選んだのである。」(Ricardo, D., *On the Principles of Political Economy and Taxation*, *The Works and Correspondence of David Ricardo* ed. by Piero Sraffa, Vol.

(二) リカードのスミス解釈について

一定の労働単位量にたいし、主観的評価を媒介としてそれが尺度単位としての固定性を有するものである、とする論述から、「労働の価値」(実質賃金率)の固定性の意味での「労働の価値」の不変性への定義変更は、スミスの推理にとっては論理必然的な過程であったとはいえ、四章末尾で提起した当初の課題、すなわち「交換価値の実質的尺度とはどのようなものであるか、すなわ

I, p.14. 掘経雄訳『経済学および課税の原理』16ページ。雄松堂書店、1972年)

「そうしてみると、アダム・スミスとともに『労働は、時にはより多量の財貨を、また時にはより少量の財貨を購買しうるのであろうから、変動するのはそれらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではない。』それゆえに、『労働だけは、それ自体の価値において決して変動しないから、それだけがあらゆる時および所においてすべての商品の価値を評価し比較することのできる、究極のかつ実質的な標準である』というのは、けっして正しくない。」(強調点はリカード。ibid., p. 17. 邦訳、19ページ。

リカードはここで「交換価値を規制する原理」あるいはその原因および尺度財の要件について言及しているのであるが、さしあたり後者についてみるならばリカードの主張は単純明快であり、それは価値が不変の大きさでなければならないということである。しかるにスミスが採択しているのは可変な媒介物にすぎないと。リカードからすれば、スミスのなかには正しい価値の尺度についての論述と誤れる尺度財の規定が混在しているがゆえに後者を放棄すればよいわけであるが、事態はそれほど単純ではない。というのも、リカードが後者の点を誤りとして批判する際には、「労働の価値」について自らが普通の商品に適用したのと同じ原理を適用しているけれども、それはスミスの「労働の価値」規定とは異なっているからである。リカードからすれば、商品としての「労働」や穀物は、彼自らが述べているように鉄や綿布となんらかわらない可変な価値物であるのは自明なことであるけれども、スミスにはそうした規定はないのである。

スミスにリカード的な「労働の価値」規定が欠如しているのは、労働が普通の商品のように対象化された労働量によって直接的にその大きさを規定しえないという理由だけからではない。先にもみたように、スミスにとってはリカードのように「労働の価値」の貨幣表現が労働の価格ではなく、「労働の価値」とは賃労働者が労働を対価に資本家から購入するところの生活必需品と便宜品の量(=物量)なのである。したがって、リカードはその価値が不変であるか可変であるかを問題にしているけれども、その価値の規定がこのような相違していることを考慮するならば、リカードのスミス批判は必ずしも要を得たものとはいえないのである。

ち、すべての商品の実質価格はどのようなものに存するか」ということに対し、て大きな路線変更を迫るものであった。この変化はリカードが解釈したように「正しい」規定の上に「誤った」規定が外から加わった、という程度で済ましようるものではなかった。論敵マルサスとの論争では「価値を富を支配する力で測る」といって非難し、マルサスが自分に向けた「交換価値の不完全な尺度と必然的かつ根本的に誤っている尺度との優劣を決めなければならない」という文章をそっくり論敵に投げ返しているのに比べれば、巨星スミスに対しては少し点が甘かったように思える。リカードが最も力点を置いてスミス批判を試みた論点、すなわち労働の報酬の騰貴が商品の価格の騰貴を伴う、とするスミスの論述の遠因をなしているにもかかわらず。

さて、「労働の価値」の不変性にスミスが力点を置いているが故に、我々もその仮定あるいは論証の正否に目を奪われるのだけれども、理論的に重大な問題は「実質価格」の定義変更、すなわち「労働の価値」の新たな定義の導入である。なぜ、「労働の価値」が物量（使用価値の一定量）でしか定義できなくなったかといえ、それはまさにスミスが労働を尺度財に選択したからであり、またなぜ労働を尺度財に選択したかといえ、それはスミスが一定量の労働（「toil and trouble」）を尺度単位に選択していたからであった。尺度単位としての労働が賃金労働者の「具体的有用労働」であり、また現実には尺度として機能しているのは、それ自身が流通手段として市場を徘徊し、したがって尺度財として機能している貨幣商品であってみれば、尺度単位として採用された労働（量）が商品としての労働、すなわち資本家の所有する貨幣もしくは財貨と現実には交換されている「労働」に転化されていくのもやむをえない。さらに以下の事情が加わる。労働能力という特殊な商品は一定の貨幣額で取引引きされており（労働の貨幣価格＝名目価格）、そうした形式の中味が一定の労働量と消費財との交換（労働の支配財貨量＝実質賃金率）であってみれば、スミスならずとも「通俗的な意味」で後者を「労働の価値」（実質購買力）と判断しがちになる。とにかくスミスにとっては、「toil and trouble」による最初の「実質価格」の定義は、特殊な商品たる「労働」には適用すべくもなかった、というのが真相であろう。

以上の二つの事情が重なって「労働の価値」の物量による定義（「労働の実質価格」）が誕生するのであるが、この「通俗的」な定義は特殊な商品たる労働のみにとどまってははいない。私はここでリカードの『原理』における次の文章を想い出さずにはいられない。

「フラン貨幣および測られるべき物が両者に共通ななにか他の尺度に還元されないかぎり、一フラン貨幣はなにものにもたいしても価値の尺度ではなくて、ただフラン貨幣の素材と同一の金属のある分量にたいする共通の尺度であるにすぎない。これら両者は共通な尺度に還元されうる、と私は思う。というのは、これらは共に労働の結果であるからである。それゆえに、労働はそれらの物の相対価値ばかりではなく、その実質価値をも評価しうる、一つの共通尺度である。」⁶⁾

さて、労働を尺度財の位置にすえるということは、デフレーターとして労働単位の貨幣賃金率を採用し、分子のディレクタンズに労働と取引きされる消費財の貨幣価格の採用を意味する。この世界において、リカードの「原理」における「共通の尺度」（＝労働）に匹敵するものは何か。それは自明のことながら貨幣価格である。そして分子の消費財はその貨幣価格水準に対応した労働単位の倍数として「共通性」を有してはいる。この支配労働単位量で表現された各財の相対価値（交換比率）は、しかしながら、これまた自明のことであるが各財の貨幣価格にもとづく取引量と同じである。銀で表現して1ポンドの価格をもつ商品が10シリングの価格をもつ財2個と交換されるということは、それを労働単位量で表現し直したからといって変わりようはないのだから。また、労働の代わりに鉄や綿布等々といった別の商品を導入しても結論が同じになるのもいうまでもない。そうしてみると、労働を尺度財の位置にすえるということは、最初の「実質価格」の定義とはまさに次元を異にする、いわば遊戯の世界であることがわかる。

以上の単純な考察から、次の二点が指摘できると思う。

第一に、こうした方法では当初に意図した「交換価値の実質的尺度」あるい

6) *ibid.*, p. 284, 邦訳, 328ページ。

は「実質価格」の形成原理は追求されうべくもないということである。「交換価値を規制する原理」として財の貨幣＝名目価格がさし示す以外の何者をもそれは呈示しないのだから。ここから論議は貨幣価格をもつ財の「交換価値を規制する原理」もしくは原因の探究に向うことから離れ、一方では交換価値とはなんら抵触しないどころか、それを理論上の与件とした上で「福祉」指標の世界に次元を移すか、あるいは、後にスミス自身が「過去四世紀間における銀の価値の変動に関する余論」でくわしく論じているように「実用」的な次元、すなわち名目価格から異時点間における実質購買力を算定するための、いわゆる指数論に移行するかである。「同じ時と所」においては、こうした「実質価格」論が「実用」性の上からみてもまったく役に立たない、ということをスミス自身が読者に告白しているほどである⁷⁾。

二点目はリカードのいう「共通性」の規定とかかわって、「価値」の定義に関することである。

スミス自身も言明しているように尺度財の要件が尺度される商品と同じく価値をもち、その上でさらにそれが不変の価値でなければならない、とすれば、この視点から「実質価格」論を検証してみると事態は一層ははっきりしてこよう。まず肝心なことであるが、労働が尺度財の位置におかれるということは、分母に労働単位量がおかれることであって「労働の価値」がおかれるのではないということである。「労働の価値」はその「実質価格」を労働の購入財貨量として、すなわち P/W を逆にした W/P の比の値として定義されていることを想起こそせばその点は肯首されよう。またデフレーターとして貨幣賃金率を採用することから、労働を尺度財に選択した際の分母は賃金単位（＝貨幣賃金率）と解されることが多く、事実、ブローグ教授自身スミスの支配労働「価値」説をケインズの「賃金単位」に似せて解釈している。しかしながら特定の財を尺度財（ニューメレール）にするということは、財の「価値」を尺度財商品（＝使用価値）の数量として定義することであるから、尺度財として機能する

7) 同様な「告白」は、1823年に出版されたマルサスの『価値尺度論』のうちにもみられる。三辺清一郎訳『マルサス・価値尺度論』44～45ページ。実業之日本社、昭和19年発刊。

のは尺度財の貨幣価格ではなく商品そのもの、使用価値なのである。

ところが皮肉なことに分母が尺度財の単位量であってみれば、まさに分子に登場する財となんの「共通性」をもたないのは自明である。したがってその機能を遂行するために分母子双方ともにその貨幣価格を借用してこななければならないというわけである。労働を尺度財にしているこの場合においても、労働単位量それ自体は独力で分子を通分するという能力を持っていず、単位貨幣価格という外的な要因に依拠せねば自らの任務を遂行しえないのである。このようにみえてくると、支配労働説的な「価値」規定というのは、貨幣価格とは区別される real な「共通性」を欠如している意味において、まったく価値理論の要件とでもいうべきものを喪失していると言わねばならず、求める目標 (real price) とその形式がまったく二律背反的状况にある論理的構築物であるといえよう。

それでは以上の二点にわたる考察から帰結されることは何か、スミスが尺度財に採用しているのは「労働単位量」であることを確認した上で次のことがいえると思う。すなわち、スミスの定義する商品としての労働は、その名目価格としての貨幣賃金率と「実質価格」としての購入財貨量の二つ以外に「労働の価値」の定義を有していないのであるから⁸⁾、そもそもスミス自身にとって

8) この点の確認は、論争となっている第五章、第二パラグラフにおける「労働の価値」なる術語の解釈にも糸口を与えてくれる。それは有名な「労働」こそが「first price」, 「original purchase money」であるとする文章の前に登場する次の文章である。「これらの貨幣または財貨は、一定量の労働の価値をふくみ、われわれはそのとき、それらを等量の労働の価値をふくむと思われるものと交換するのである。労働こそは……」(Smith. A., *The Nature and Causes of The Wealth of the Nations*, ed. by Canan E., p.30. The Modern Library. 大内・松川訳『諸国民の富』(-), 岩波文庫, 151ページ)。解決の糸口は簡単である。一つは、尺度財としての労働をスミスが強弁して「労働の価値」として登場させる時、その場面は賃労働者の所有する労働と資本家の所有する消費財との交換の場面ではなく、財相互の交換場面だということ、第二点目としては、すでに述べた通り、スミスにはリカード的な意味での「労働の価値」タームは欠如しており、彼にとって存在するのは名目価格以外には物量タームの実質賃金率としてのそれしか実存しない、ということである。だとすれば名目価格に対比して「実質価格」の根拠を「toit and trouble」に求めているコンテ

も尺度財の要件とされた価値および不変の価値——どのように定義されたものであれ——という二つの規定をまったく欠如しているということ，したがっていかなる意味でもその価値性格——最底の要件は「共通性」である。もちろん貨幣価格とは区別されたそれであるが——を持ち合わせていない商品としての労働が「価値」の尺度財でありえるわけがないし，はたまた「価値」規定の洗礼を受けていないものが不変の「価値」であるはずもなく，行き着くところはスミスの命題とはまったく逆のことがら，すなわち商品としての労働は財の「価値」の「普遍の標準」でもなければ「究極」のそれでもないということにつきる。支配労働「価値」説というのはそうした点からいえばまさに言葉の矛盾であり，「価値」規定を欠如した上で「価値」を説明せんとする無謀な試みといえる。

(三) 『諸国民の富』第1篇，第6章における，いわゆる支配労働「価値」説的展開について

スミスの論述において労働が「価値」の標準として再度顔を出すのは，第1

クストにおいて登場する「労働の価値」タームが，主観的な評価を受けた「量」であるかどうかはともかく，「労働の量」としか読めないことは明らかであろう。この点ではマルクスの『剰余価値学説史』における解釈は先見の明であり，決して自説を保強するための解釈ではない。なお，これに関連して「first price」および第七パラグラフに登場する「かれが支払う価格」についても述べておきたい。特に後者が財貨の価値の可変性に「労働の価値」の不変性を対置するかたちで述べられていたこともあって，前稿ではそれを貨幣賃金率一定と解釈したが，それは初歩的な誤りであり撤回したい。労働者が「支払う」のは財の獲得に要する「犠牲」としての労働（量）であり，この点は地代論に関する第11章の第3節中の「銀の価値の変動に関する余論」においても，しばしば「支払う価格」というのが提供する財貨の量と「同じこと」であると論じられていることから明白である。別の箇所から一例をあげておけば，それは「年々に輸入する食料や原料に対して，都会が現実には支払う価格は，都会から年々に輸出される製造品やその他の財の量である」（第1篇，第10章，第2節，邦訳(-)，345ページ）といった具合である。なお，この点に関しては，飯田和人氏が論稿「スミスの価値尺度論について」、『明治大学社会科学研究所紀要』（1985年）において明確に指摘しているので参照されたい。

篇、第6章の周知の箇所、すなわち土地の占有と資本の蓄積がおこなわれた後の社会における商品の価格に関連してのことである。それは次のような叙述から成っている。

「注意されなければならないのは、価格のすべてのさまざまな構成部分の実質価値は、そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって測られる、ということである。労働は、それ自体を労働に分解する価格部分の価値を測るばかりではなく、それ自体を地代に分解する価格部分の価値およびそれ自体を利潤に分解する価格部分の価値をも測るのである。」⁹⁾

この論述はマルサスが「実質的交換価値」の尺度として「正しい」と推奨したもののだが、これには以下のような現実分析がその背後にある。

「文明国では、その交換価値が労働だけから生じる商品は少数しかなく、地代と利潤とがはるかな大部分の商品の交換価値に大々的に寄与するのであるから、その国の労働の年々の生産物も、それを産出し、調整し、またその生産物を市場へもたらすのについやされた労働よりも、はるか多量の労働をつねに購買または支配するにたりるであろう。もしこの社会が、年々に購買しうるいっさいの労働を使用するものとすれば、労働の量は年ごとに大いに増加するであろうから、後続するまい年の生産物は先行するまい年のそれよりも、おびただしく大きな価値のものになるであろう。けれども、年々の全生産物が勤勉な人々を扶養するために使用される国などというものは一国もない。……」¹⁰⁾

この後の引用した箇所からはスミス経済学の大きな一端がうかがわれ、まさに『諸国民の富の性質と原因』に関するスミスの持論が顔をのぞかせているのであるが、本稿で検討するのは先に引用した箇所である。労働の「実質価格」を実質賃金率と解しその量の安定性を仮定することでもってそれを「労働の価値」の不変性である、と強弁したスミスであったが、そのことは異時間における財の実質購買力を算定するのに貨幣賃金率を用いたというだけのことであって、労働が財の価値の「普遍の標準」であることの論拠になるものではない、

9) *ibid.*, p. 50, 邦訳(-), 191ページ。

10) *ibid.*, p. 54, 邦訳(-), 199～200ページ。

ということはすでにみた。支配労働説的論法と組み合わせられた不変の尺度論は、異時点間にしか適用できない不完全なる統計上の技法と墮してしまっただけであったが、今回の場合は新しい分析的手法としての要素をかねそなえているのであろうか。

確かにここでは三つの要素所得の「実質価値」の測定が問題にされているから、いわば同時的な横の関係であり、異時点間の実質値の算定が問題にされているわけではない。それではここにおいては労働が財の価値の「普遍の標準」であることが論証されているのだろうか。この論述においてまず気の付くことは、上記の意味での「労働の価値」の不変性が少しも自己の立論の根拠として登場させられていないということである。ここで問題にされているのは財の構成要素の「実質価値」であって財貨それ自体の「実質価値」でない。とはいえ、このことはむしろスミスが当初意図した *real price, real measure* の規定には「労働の価値」の不変性が少しも前提条件となっていないことを物語っておもしろい。

いま、ある財 A の生産に N 人が投入されたとして、労働一単位（1日）当りの貨幣賃金率を W 、利潤および地代の貨幣価格（自然率）をそれぞれ P 、 R とすれば、スミスが上記で論述していることは次のように表現できよう。

$$\text{財 } A \text{ の貨幣価格} = N \cdot W + P + R$$

$$\text{財 } A \text{ の「実質価値」} = \frac{N \cdot W}{W} + \frac{P + R}{W}$$

この等式が表現しているのは、財 A は $\left(N + \frac{P + R}{W}\right)$ 単位量の労働を支配・購入できる、あるいはそれと等価であるということにつきるが、果してそれは労働が、「普遍の標準」であることの立証になっているのであろうか。2番目の引用が示しているように、この「実質価値」表示方式の実際の意図が $N \cdot W + \frac{P + R}{W} > \frac{W \cdot N}{W}$ ということの確認にあるのであれば、リカードウがマルサスに反論して述べているとおり、分母は鉄や砂糖やコーヒーでは何故だめなのか、ということになる。いま財 A の「実質価値」を算定するための尺度財にコーヒーを採用してみても、 $N \cdot W + \frac{P + R}{X} > \frac{N \cdot W}{X}$ となり、上記の不等号は成立

する（ただし、 X はコーヒー単位の貨幣価格）。すべての財についてこうしたことは成立するのであるから、財の支配労働単位量以外にも無数の「実質価値」が成立し、その結果は労働が「唯一」の「普遍的」な標準ではない、ということだけである。そもそも財の生産に要した総経費が費用の一部より大きい、という「経験的事実」は尺度財の種類に依存しているはずがなく、したがって尺度に労働を採用したからといって支配労働単位量 $>$ 投入労働単位量なる命題は、コーヒーを尺度とした命題が示す以上の真理を含まないのも当然である。

もちろん、スミス自身はこんな馬鹿げた遊戯をするために大著をものにしたわけではないとすれば、分母に特殊な商品、すなわち富の源泉としての労働をもってきた場合にのみ、会計的不等式が示す以上のことから、資本主義システムの下では生産的労働者の雇用の増大を通じて富の増大が可能である、ことを主張しているわけである。おもしろいのは、同じことを主張しながらも論敵リカードの『原理』に対峙させられていたマルサスは、上記のスミスの主張に加えて会計的不等式それ自体も、労働を尺度にする場合にのみ最もよく説明しようと論述していることである¹¹⁾。19世紀初期の価値尺度に関する論争は早くも中期において「不毛」な論争である、とミルをしていわしめたが、ミルに総括された価値源泉論、価格決定論と価値尺度・評価論の分離とは逆に、価値尺度に関する論争が価値原因論そのものであったことを二つの『原理』は示している。

それにしても、土地の占有と資本の蓄積以前の社会に適用された価値理論が異時点間における財の実質購買力を算定する統計的技法に堕し、それ以降の社会の叙述においてはこれまた価値とは無縁な富（の増殖）の世界に移行してしまうのは、一体いかなる理由によるのであろうか。ささいな点であるが私が指摘できるのは以下の二点である。

- 11) 商品の供給の条件に利潤が不可欠なことではリカードと一致していたにもかかわらず、投下労働説を論駁せんとした決意のあまり、マルサスには労働を尺度財に採用する場合にのみあたかも賃金、利潤、地代という所得が同質性に換えされ、したがって労働を最良の尺度であると錯覚している節がある。

一つは、良くも悪くも出発点となった次の命題、すなわち土地の占有と資本の蓄積以前においては、「労働の全生産物は労働者に属し、そしてある商品の獲得または生産にふつうついやされる労働の量は、その商品がふつう購買し、支配し、またはこれと交換されるべき労働の量を規定しうる唯一の事情である。」¹²⁾——の中にスミス混迷の源があると思う。いま一要因（労働のみ）世界を仮定し、ある財の総貨幣費用を C 、労働一単位当りの貨幣賃金率 W 、投入労働量を N 単位とすれば、定義より $C = N \cdot W$ 。したがって、 $N = C/W$ すなわち、支配労働単位量は恒等的に投入労働量と等しくなる。この恒等的命題は総費用が労働投入量に比例するというを示しているだけで、価値あるいは *real price* の原因を示してはいない。こうした貨幣タームの費用論的接近方法に立脚しているかぎり、投下労働説は生産要素が二つ以上に拡大してくれば自動的に崩壊する。投下労働「価値」説は土地の占有と資本の蓄積以降は支配労働「価値」説に席を譲るのではなく、当初の規定の中に崩壊の根拠を有していたのである¹³⁾。後者が価値理論の要件を備えてないことはすでにみたとおりである。

もう一点は少々論理的なことかもしれないが原因と尺度および尺度財に関することである。リカードは価値がなんであるかが規定されていなければ、いかなる尺度も価値の尺度ではない、ことを力説した上で、「悲願」として不変の価値をもつ尺度財を追求した。また、何人もその受け取りを拒否しない絶対的購買力としての貨幣の由来を物々交換の不便を取り除くために人間が発明した道具とスミスはみなし、貨幣が尺度財であるのはそれが流通手段として機能していることに求めた。したがって貨幣の特殊な能力は普通の商品とは関係のない世界で成就されたことになり、その結果、皮肉にも商品としてはまったく普通の商品と同じものと理論的には観念されることになった。

ところで、リカードのように商品と尺度財の双方において、交換価値の大

12) *ibid.*, pp. 47-48, 邦訳(-), 186ページ。

13) この点からして、和田重司教授の次のようなスミス解釈には疑問が残る。「スミスは第6章における資本制の商品の価格を投下労働によって説明しえないという予想のもとで、あらかじめ、第5章で支配労働による価値尺度論を布石しておいたようにも考えられる。」(和田重司『アダム・スミスの経済学』ミネルヴァ書房、1978年、63頁)

いさを規制する価値の原因が同時に価値の尺度として前提されているとき、尺度財の果す役割は何か、それは商品が自己の価値の大いさを表示する素材・現物（使用価値）を提供するということにつきるであろう。すなわち、各商品がその「実質価格」を X 時間、 Y 時間と時間で表示する代わりに、 X' の銀量、 Y' の銀量、あるいは度量標準の法定貨幣呼称を定めてそれを X'' ポンドあるいは Y'' ポンドという風に。こうしたことは通貨学派の権威リカードゥならずともいわば自明なことであり、もちろんのこと、こうした事柄でリカードゥが悩んだわけではない。また、いわゆる「不変の価値尺度」論が介在する余地もここには存在しない。たとえば、商品 A と B の間において相対価値が変化した際、どちらの側に変更があったかを我々が知ろうとすれば、いわゆる「絶対」価値の尺度を適用すればよいのであって理論的にはなんの困難もないはずである。このことは競争による価値の再配分を前提すれば生産価格についても同様であろう。リカードゥが困難と考えたのは上記の推論を尺度財それ自身が演算してみせる場合であった。というのも、 A 一単位が X 時間、 B 一単位が Y 時間、貨幣商品一単位が Z 時間を要したとすれば、 A の価格は X/Z 、 B のそれは Y/Z 、 Z 時間を要した貨幣商品一単位重量の貨幣名を1ポンドとすれば、 A の価格は X ポンド、 B の価格は Y ポンドとなり、 A と B は Y 対 X の比率で交換される。ここでは尺度財を導入してもあたかもそれは何の機能も果していないかの如く、両財の交換比率はそれらの「絶対」価値によって、すなわち、我々が尺度財を無視して直接適用した尺度としての労働時間によって規制されていることがわかる。したがってこの場合には問題はない。しかるに生産要素の報酬率（賃金）の変動や資本構成および回転期間の変動というような労働時間以外の要素が相対価値に影響を与えることが無視できないとき、上記と同じ解釈ができるのであろうか。私は尺度財がどのような資本構成を持とうとも、尺度される商品の側の交換比率に対して尺度財は影響を与えることはできないから、上記の単純なケースと同じことがいえると思う。リカードゥは労働のみでしかも生産期間が一年間という非現実的な仮定を尺度財に設けることによって、諸商品の「実質価値」を測定しようとして、論敵マルサスに投下労働

説を攻撃する格好の材料を与えることになったが、実はこれは尺度財に関する問題ではない。マルクスが中位の資本構成をもった部門（そこでは、価値と生産価格が一致している）を想定したのに相当するともいえるものであり、誰しもマルクスのこの想定（『資本論』一巻における「資本一般」の世界に相当）をもって尺度財に関することだと判定しないだろう。リカードゥを悩ましていたのは実は尺度財に関するのではなく「絶対価値」に関する尺度の適用方法についてであった。

価値規定が分析の結果として与えられていれば、「実質価格」を算定するために価値の尺度を適用する際、少しも尺度財は機能を果す必要はなく、我々はあたかもそれを無視して労働時間によって財の（絶対）価値したがってまた相対価値＝交換比率を算出しうることは以上みたとおりである（不変の価値をもつ尺度財が介入する余地がないこともすでにみたとおりであり、スミスの場合、不変の価値が「労働の価値」＝「実質価格」＝実質賃金率の安定性と解され、尺度財としての労働単位（量）に関するものではないから、この点は解決済みである）。スミスの場合、当初存在した価値規定（「toil and trouble」にもとづく「実質価格」の規定）が不変な「労働の価値」の導入によって雲散霧消したことはすでにみたが、尺度財に商品としての労働をおくことにより尺度として労働単位量を設定した限りにおいて、価値規定が富の増大に席を譲っているとはいえ、価値の原因とからめて尺度を問題にしていたといえよう。決して不変の「価値」をもつ尺度財をもて遊んでいたわけではないことだけは確かである。